

日本中國學會報 第七十二集
二〇二〇年十月十日 發行 拔刷

王僧虔の書觀——「稱目」と書の生成

關 俊 史

王僧虔の書觀——「稱目」と書の生成

關 俊 史

はじめに

南齊は文化が活況を呈した時代であった。それは竟陵王蕭子良を中心とするサロンが形成されたことに求められる。ここでは諸文化が醸成され、特に文學では沈約らを中心とする「永明文學」というスタイルを形成するに至った。一方で近年張天弓は書の議論や書文化もそこで形成されていったとして、これを「永明書學」と位置づけている^①。張天弓の「永明書學」では、數人の名を擧げるが、その中でも王僧虔の存在を無視することはできない。

王僧虔（元嘉六（四二六）年から永明三（四八五）年）は劉宋から南齊にかけて生きた人物である。諡を簡穆^②といい、官は會稽内史等を経て宋の文帝の時に侍中に至る。出自は琅邪の王氏であり、父は王曇首、祖父は王珣である。王僧虔は高官にありながらも諸技に秀でており、音律や書、天文學に精通していたという^③。

王僧虔に関する先行研究は「誠子書」^④をめぐる歴史學的視座からの議論と「論書」^⑤をめぐる書論、書道史的視座からの二つの潮流に大別される。

就中、書道史的視座からの研究は、目加田明子の「王僧虔小考」^⑥がその先鞭的なものである。目加田の論は次の四點に要約される。まず、王僧虔「論書」は先行する劉宋の書論の影響を充分に吸収した形で著わされたものであるということ。次に、王僧虔は筆力を重んじ、それを書に必要な第一の要素と見なしていた。加えて、筆力は天然と関連し、規矩、風流趣好、媚好と對立した概念として扱われているということ。そして、劉宋において稱揚された王羲之に對して批判的であり、王羲之を稱揚した。その視座が「梁の書壇に極めて深く流れ込んだ」という^⑦。このほか、テキスト的な問題からアプローチしたものに「論書」が極めて不安定な要素の強い文獻の上に成り立つものであることについて、大野修作「王僧虔「論書」より『法書要錄』を見直す」^⑧がある。

目加田の言を借りれば、王僧虔が「王羲之の優位を準備した人物」であることは認められよう。それは、もちろん劉宋の書論をひき承けたものである。ならば王僧虔の書に對する視點の特異性はどのような所に存在し、なぜ書を論じる必要があったのか。本稿ではこうした問題について聊か検討を加えてみることにする。

一、書を語るの必要性

王僧虔の書觀を採る上では「論書」を中心にその検討がなされてきた。だが、「論書」はテキスト的に問題を孕んでおり、現行の「論書」をみると、文意が連続しない箇所が見られる。それは、おそらく「論書」は單行したものではなく、いくつかの王僧虔の書についての言説を後人が一つにまとめたものであるからだと考えられている。⁸⁾

現行の「論書」の構成をごく簡単に示せば概ね二つの部分に分かれる。一方は書人評價を述べる部分である。これは羊欣の「古來能書人名」(以下「古來」)の體裁を踏襲したものであろう。書人の名を擧げ、書人についての評價を短文にて箇條書きにしたものである。また一方は尺牘であるとされる。

本論ではまず、尺牘部分とされる箇所を切り口として、検討をはじめたいと思う。

承^{かみじけ}なく祕府を閲覽し、備さに群跡を睹る。崔^{崔瑗}・張^{張芝}なるも美を逸少^{王羲之}に歸し、一代の宗とする所と雖も、僕前に古人の跡を見ず。計るも亦た以て逸少を過ぐるもの無ければなり。既に妙盡深絶、便ち當に之を實録に得べし。然れども前世の稱目を觀るに、竊かに疑ひ有り。¹⁰⁾

わたくし王僧虔は祕府で書跡を閲覽し、あらゆる書跡に目を通した。崔瑗・張芝であつてもその美は王羲之に歸結してしまふ。一代の範となるものであるといつても、わたしは古人の筆跡を見ていなかった。それは推し量つてみたところで王羲之よりも勝る者がいないからである。王羲之はすでに妙が窮まり深く非常に優れており、それは忠實に書き記されたものから知りうる。だが先行する稱目を見て、わたし

は疑いがある、という。

この箇所は他の書人に對し、王羲之の優位性を王僧虔が認めている部分であるが、傍線部における「前世の稱目を觀るに、竊かに疑ひ有り」という箇所注目したい。だが、ここで具體例を提示しているわけではない。

「前世の稱目」に疑いがあるということは王僧虔にとつて、既往の「稱目」を手放しに認める譯にはいかなんか何かがあり、それを不服に感じるからこそ、書を論じたと見ることができよう。では王僧虔がいう「稱目」とはどのようなものであるかを検討したい。

二、「稱目」について

そもそも「稱目」とは、潘運谷によれば「先人が評價した箇條書きのもの」¹¹⁾であるという。しかし、「稱目」を付すことの本來的な意味を古典的言説に基づいて考える必要がある。そこでまず、「稱」と「目」について字義を確認してみよう。

稱…銓なり。禾に从ふ尪の聲。¹²⁾

目…人の眼なり。象形。童子を重ぬるなり。¹³⁾

『説文解字』によれば、「稱」は「銓」、すなわち、はかりしらべることを意味するという。しかし、「目」については人體の器官の意味だけが説かれている。

ところが、時代が下ると「目」は品評の意味でも用いられるようになった。たとえば、范曄『後漢書』には次のようにある。

曹操微なりし時、常に辭を卑し禮を厚くし、己の目を爲さんことを求む。¹⁴⁾

李賢注…品藻をして題目を爲さしむ。

李賢注をもとにすれば、品評を行うことで「題目」をなすこと、すなわち、人物の評価を曹操が求めていたことが窺える。このように「目」とは人物の評価にかかる營爲であるといえる。

「稱目」として熟して用いられる例は僅かであるが、六朝期の文獻、特に六朝貴族のあるべき姿を求めた『世説新語』には「稱」、「目」として多く見える。それぞれについて一瞥しておくことにしたい。

まず、「稱」について検討する。

①謝太傅 絶だ褚公を重んじ、常に稱すらく、「褚季野言はずと雖も、四時の氣も亦た備はれり。」と。

②撫軍 之と話言し、咨嗟して善を稱して曰く、「張憑は勃率たれども理の窟爲り。」と。即ち用つて太常博士と爲す。

③毛伯成 既に其の才氣を負ひ、常に稱すらく、「寧ろ蘭摧玉折を爲すも、蕭敷艾榮を作さず。」と。

④簡文 許掾を稱して云ふ、「玄度の五言詩は、時人に妙絶すと謂ふべし。」と。

⑤謝太傅 王修齡を稱して曰く、「司州 林澤の遊びに與るべし。」と。

この「稱」の用例からいくつかのことが言えよう。まず、評価が實際の政治に関連する場合があるということである。①からも窺えるが、②では「稱」にもとづいて太常博士に登用されたことが記されている。③は自身の信條を語つたものであるが、それは一方で自己評價という面を有している。そして④や⑤については①・②とは異なり、實際の政治から離れて、その人が持つ才藝が評價されている場合である。特に⑤ではその才藝の水準が高く文雅な遊びに参加することが評

價されており、同好の士として認められている。では、「目」についてもこのような性質がみられるのだろうか。

「目」は『世説新語』では賞譽篇に多く見られる。こちらもいくつか例示してみよう。

①庾公 庾公 中郎を目すらく、「神氣融散し、差上るを得たるが如し。」と。

②王戎 山巨源を目すらく、「璞玉渾金の如し、人皆 其の寶なるを歛ぶも、其の器に名づくを知る莫し。」と。

③王大將軍 自ら目すらく、「高朗疏率にして、學は左氏に通ず。」と。

④人有りて 杜弘治を目すらく、「標鮮清令にして、盛徳の風、樂詠す可きなり。」と。

⑤簡文 敬豫を目して「朗豫」と爲す。

各例から「目」の性質を考えると、①や②については、「如」とするよう比況によつてその人物を形容するという特性を持つ。③は「稱」にも見られたように自身の評価をする例である。④では特定の人物によるものではなく、當時の一般的な評價として通行していたものであろう。⑤には諧謔の要素が含まれており、その人となりや字の「敬」ではなく、「朗」であることを端的に表わしている。

またこの他に、「目」は人物の容姿や技藝などの評價に對しても用いられるようになった。例えば、王羲之の容姿には「時人 王右軍を目すらく、飄として遊雲の如く、矯として驚龍の若し。」との評價語があつた。これは唐修『晉書』において、王羲之の書を評價する語として變容することになる。

以上より「稱」「目」の性質をまとめれば、人物あるいは自身の才藝の秀でた能力や容姿、あるいは人物を評價することであると見え

る。そしてそれによつて、實際の政治に参畫したり、同好の集いへの参加が許可されるようになるなど社會的效用もあつた。そして、「稱」・「目」の表現は、句數や語數が不定形であるが、いくつかの句で端的に表現されるものである。

こうした人物評價を書物に記載するのは、「稱目」を與えることそれ自體に意味があり、それを記して残すことがその人物の價值を決定づけることに繋がるためである。

そして、「稱」や「目」を與えるということは學例からも明らかのように、六朝の人士において一般的に行われていたのである。

三、「論書」の「稱目」の特質

では、翻つて書を論じた文獻における「稱目」とはどのようなものであるかを検討したい。ひとまず本稿では、前節の「稱目」の定義に従つて特定の人物の書一般に對する評價付けであるとみなして論を進めることにする。⁽²⁹⁾

王僧虔「論書」のように書人を列擧して「稱」することは、先行する書人評價書である羊欣の「古來」にも見られる。「古來」では、王僧虔が高祖、蕭道成に求めに應じて奉呈したものが現在に傳わるとされる。「古來」は出身地および名、字、官職名および能くした書體を簡條書きに記した極めて簡略な書人評價書である。この他に一部の書人については書人にまつわる記事を記すが、その記述もいたつて簡素なものである。

現行の「古來」の成書に王僧虔が關與していないと即斷することはできないが、彼がそれを實見していたことは確實である。そのため、王僧虔が「論書」中の書人評價を記すにあつて「古來」を参考にし

ていたことは十分に想定される。そこで「古來」と「論書」の比較から王僧虔の「稱目」の特徵を検討したい。「古來」において「稱」されているものをまずは見てみよう。

誕の子〔草熊〕少季も、亦た能の稱有り。⁽³⁰⁾

吳人の皇家、草を能くす。世に沉著痛快と稱せらる。⁽³¹⁾

前者の草熊の例は「能」とだけの評價であり、「稱有り」と記されている。だが、これだけでは具體的にどのような「能」であつたのかが説明されておらず、その實態を把握することができない。後者の皇家の例も同様である。皇家の例では「沉著痛快」という評價が附されている。このように、「古來」では「稱」として記すことは稀であり、ほとんどの書人の記述は能くした書體やその出身を記すに留まる。

これらを踏まえた上で王僧虔の「論書」に立ち戻りたい。前節で扱つた尺牘の續ぎには次のようにある。

崔〔崔瑗〕・杜〔杜牧〕の後、共に張芝を推す。仲將〔崔暉〕之れを筆聖と謂ふ。伯玉〔崔暉〕

は其の筋を得て、巨山〔崔暉〕は其の骨を得たり。索氏〔索靖〕は自ら其の書、

銀鉤蠶尾と謂ひ、談ずる者誠に其の宗を得たりといふ。劉德昇〔劉德昇〕

鍾〔鍾繇〕・胡〔胡昭〕の師とする所と爲り、兩賢並はせて肥瘦の斷有り。⁽³²⁾

王僧虔は崔瑗と杜度に後續する者として、張芝を高く評價した。草誕は張芝を筆聖といつた。衛瓘は張芝の筋を得て、衛恆はその骨を得た。索靖は自分で自らの書を「銀鉤蠶尾」といつた。議論する人々は實に張芝の本質を得ているといつた。劉德昇は鍾繇と胡昭の師であり、二人はともに書が肥っているか瘦せているかの差があつた、という。ここにいう「肥瘦」とは恐らく線の太細を指すのであろう。

「銀鉤蠶尾」という索靖の「稱目」は「論書」の別の箇所にも見える。

索靖、字は幼安、燉煌の人。散騎常侍たり。張芝の姉の孫なり。芝の草を傳ふるも形異なる。甚だ其の書を矜り、其の字勢を名づけて、銀鉤蠶尾と曰ふ。⁽³³⁾

索靖は張芝の姉の孫であり、自ら、その書を誇っていたという。これについて「談者」すなわち、評者とその當を得ていることが記されている。この「談者」については、この尺牘部分にのみ見られる。この評價は現在傳わる文獻では「論書」が初出となるものであり、「古來」には見られないものである。

この索靖のように王僧虔の「論書」と「古來」とで名が掲出されていて重複する書人が十三名いるが、王僧虔の「論書」では「古來」に記されていない王羲之の言による評價、すなわち「稱目」が記されている例がある。例えば李式の評價である。

古來・江夏の李式、晉の侍中、隸・草を善くす。⁽³⁵⁾

論書・李式の書、右軍云ふ、「是れ平南の流、庾翼に比すべし。

王濛の書も亦た庾翼に比すべし。」と。

「古來」では単に官職と能くした書體を記すのみであるが、「論書」ではそうした情報を一切記さず、王羲之の言を記している。こうした例は他にも見られ、王洽の記述にも見られる。

古來・王洽、晉の中書令、領軍將軍たり。衆書通じて善くするも、尤も隸・行を能くす。從兄の羲之云ふ、「弟の書遂に吾に減ぜず。」と。

論書・亡曾祖領軍の洽、右軍に書を與へて云ふ、「俱に古形を變ず。爾らざれば今に至りて猶ほ鍾・張を法とす。」右軍云ふ、「弟の書遂に吾に減ぜず。」と。⁽³⁶⁾

この例では、「古來」では先と同じように簡潔に情報を記すに留ま

り、末に王羲之の評価を載せる。一方、「論書」では王羲之の言を引く點は「古來」と同様であるが、王洽と王羲之がともに「古形を變じようとしていたことが記される。

このほかにも「古來」と共通している人物を掲げると、「論書」では王羲之についての言及が爲されている點に差がある。郗愔の例を見てもみることにする。

古來・高平の郗愔。晉の司空、會稽内史たり。章草を善くするも、亦た隸を能くす。⁽³⁷⁾

論書・郗愔の章草は、右軍に亞^つぐ。

郗愔の評価をめぐっては、「古來」では章草・隸書を能くしたことが記される。しかし、「論書」では章草に限定され、王羲之に次ぐものであるという評価のみ記されている。また、王廙の例を見てみよう。

古來・瑯琊の王廙。晉の平南將軍、荊州刺史たり。章楷を能くし、鍾の法を傳ふ。⁽³⁸⁾

論書・王平南廙は、是れ右軍の叔なり。江東を過ぎし自り、右軍の前は、惟だ廙を最と爲す。畫は晉の明帝の師と爲り、書は右軍の法と爲る。⁽³⁹⁾

王廙の書が何に基づくものであるのが、明確に「古來」と異なっている。「古來」では、鍾繇の法を傳えているとするが、その記述は「論書」にはない。「論書」では王羲之書法の由來となると記す。ここにもやはり、王僧虔による王羲之稱揚の意圖を見いだすことが出来るだろう。

ここまで、王僧虔「論書」にみられる「稱目」の検討を羊欣「古來能書人名」を補助線としてつつ検討してきた。「古來」と「論書」を比

較したとき、「古來」では單に能くした書體程度の情報しか書かれていない簡潔なものであったが、他者の言を引用することで、「古來」とは異なつた新たな情報を呈示することになった。それは特に王羲之について顯著であり、王僧虔が王羲之を價值判斷の一つの基準としていたということが窺えるであろう。つまり、王僧虔の「稱目」とは「計るも亦た以て逸少を過ぐるもの無ければなり」と述べているように、比較する對象がないとする王羲之を絶對として、それによつて他を比較していたと言えるだろう。

王僧虔の書の評論は如上の視座を持つていた。しかし、王僧虔はこうした書の評論を行うだけではなかつた。

僧虔 弱冠し、弘く厚く、隸書を善くす。宋の文帝其の素扇に書するを見て、歎じて曰く、「唯だ跡子敬に逾ぶに非ず。方當に器雅より之に過ぐるべし。」と。

右の通り、王僧虔は能書として正史に記されている。すなわち、書の評論に留まらず、自らも書字行爲によつて名のある者であつた。王僧虔の書觀における、他人に對する評價は「論書」から窺うことができた。しかし、實際の書字行爲については王僧虔はどのように考えていたのか。その一端が「論書」中の道具の效用について述べた箇所に見られる。

妙物 遠し。邈なること追ふ可からず。遂に思ひをして弱毫を挫かしめ、數をして陋墨を屈せしむ。

「數」は「わざ」の意味として解しておく。ここでは「思」と「數」、言い換えれば「心」と「手」を問題としている。こうしたもののほか、實際の書字行爲に關することを記したのが「書賦」である。

四、「書賦」にみる王僧虔の書觀

王僧虔の時代、書人評價の中に垣間見える一つの關心事があつた。それは、書における先天的に持ちうるものと後天的に獲得される技術の兩側面をどのように捉えるかであつた。表現者が個々に持ちうる獨特の性質とそれを表現する手段や技法のせめぎ合いはあらゆる創作事において逃れられない命題であり、書もまた例外ではない。

現在傳わる「書賦」はもとより傳承の過程で脱落があることが指摘されている。また、版本による異同も多く、一部の箇所については意も非常に難解であるとされる。ひとまず現在に傳わる王僧虔「書賦」の全文を掲げておくことにしよう。なお、原文の上に附された記號は後の検討に用いるものである。

〔一〕情憑虚而測有

情は依據する所がないことで有をはかり

思沿想而圖空

思いは願ひ思うことに従つて空をえがく

〔二〕心經於則

心は根源的法則を経て

目像其容

目はその姿態をかたどり

手以心麾

手は心によつて指し示され

毫以手從

筆は手によつて従ひ動く

〔三〕風搖挺氣

風が揺れることで氣を動かし

妍嬾深功

あでやかさは書の出來を深くする

爾其隸〔也〕

このように隸書というものは

明敏婉嬈

動きの早いしなやかな尺取蟲が

絢借移將

あやのあざやかな所を走り回るようなものだ

摛文匪綺

(もしくは) 文章を美しい色飾りにのせたり

託韻笙簧

儀春等愛

麗景依光

沉若雲鬱

輕若蟬揚

稠必昂萃

約實箕張

垂端整曲

裁邪製方

或具美於片巧

形綿靡而多態

氣陵厲其如芒

故其委貌也必妍

獻體也貴壯

跡乘規而騁勢

志循檢而懷放

以下、それぞれの箇所について検討を加えたい。

「情」は「虚」であることによつて、「有」をおしはかり、「思」理

知的なところの働きによつて、「想」すなわち曖昧模糊としたおも

にしたがつて非可感的な對象（「空」）についてもおもいを巡らせて

くことができる、ということが述べられている。

韻を笙の簧に託すようなものである

春の萬物をひとしく慈しむのを寫し取り

美しい景觀は光によつてもたらされる

點畫の深さは雲が鬱蒼と被うよう

その軽やかさは蟬が空を舞うようである

また點畫は必ず密集する部分があり

點畫が箕を張つたように疎となる部分がある

直線を上から下に引き曲線を整え

斜角を斷ち切り方折をつくる。
美しさを一方の技巧にもたせてしまひ
竝べることで二つともそこなうことを恐れる
形は細く美しく姿態は多く
氣は高く嚴かなるは矛先のようである
故に文字のすがたを安定することで必ず
あでやかになり
文字の飾装を取り拂うことで
高貴で壯麗となる
筆跡は規則にのつとることで筆勢を走らせ
志は法度にしたがつて懷を解放する

まず第一句の「憑虚」と「測有」についてである。「憑虚」は張衡
「西京賦」に「憑虚公子なる者有り」とあり、その李善注に「憑、依
託也。虚、無也。」とある。つまり、依據するものがない無であると
解釋できる。一方「測有」についてであるが、「測」は『說文解字』
によれば、「深さの至る所なり。」とあり、水の深いところに至ること
をいう。すなわち「有」の深部、「有」の本質へ沈潜することを指す
と解釋することができる。
またこの二句は「情」——「思（理知的なところの側面、働き）」、「虚」
——「想（おもいえがくこと）」という對概念となつており、「情」——
「思」の對構造は六朝詩において見られる。
こうした「虚」という概念を用いたことは、王僧虔は「誠子書」か
ら清談に精通していたことも考えられるが、賦において創作の起點と
して「虚」を持ち出して説明する論法は、陸機「文賦」の陸機が文章
の作用について述べた章段が想起される。
伊れ茲れ事の樂しむ可きは、固より聖賢の欽む所なり。虚無に課
して以て有を責め、寂寞を叩きて音を求む。

傍線部では文章が生み出されるその際に無に働きかけることで有を
ひきだすことを述べる。この部分と「書賦」に影響関係が見いだせる
ことはすでに言及がある。ただし、張天弓はこの一點をもつて「文
賦」との関係性について言及するが、「書賦」の他の箇所にも相關關
係が見える。
この文賦の行論は「一」の王僧虔の初句の論旨に極めて近い。そし
て、その作用を述べる上で「寂寞」を「叩く」ことで「音」を求め
るという。これを解釋すると、ものさびしく静まり返つており、聴覺に
よつて感知できない状態、すなわち非可感的な領域に「叩く」とい

ことさらな營爲を加えることよつて、「音」という聽覺によつて知覺できるものが立ち現われるということである。したがつて、この論理構造から王僧虔は陸機「文賦」をモデルとしてゐることが窺える。これを踏まえて次の句の分析に移りたい。

〔二〕心經於則 目像其容 手以心麾 毫以手從

ここは秩序だつた法則を経ること、目はその姿態を寫し取ることで認識する。手はここよつて了解された法則に従つて方向性を持つて運動し、その手によつて筆もまた運動するのである。

ここで着目する必要があるのはまず、「心」についてである。先に述べた「文賦」との共通点もあるが、一方で差異があることにも着目したい。王僧虔はここで書の生成開始から實際に生成される過程を問題にしている。「文賦」では文の生成開始の「心」を次のように述べる。

其の始なるや、皆視を收め聽を反し、思に耽け傍に訊ふ。精は八極に驚せ、心は萬仞に遊ぶ。⁽⁶⁾

「文賦」は文章制作の初期段階では自身の思惟に沈潜すること、「心」は遙か彼方へ馳せるといふ。だが、書ではその様相が異なる。

「心は則を経」と初めに宣言してゐるのである。この着想は王僧虔より以前、後漢の趙壹「非草書」に見える。

凡そ人各々氣血を殊にし、筋骨を異にす。心に疏密有り、手に巧拙有り。書の好醜は、心と手に在り、強ひて爲す可きかな。若し人の顔に美惡有れば、豈に學びて以て相若く可けんや。⁽⁷⁾

趙壹「非草書」においては心と手が同列に示されるが、王僧虔は書の發生順序を設け、さらには「非草書」よりもさらに段階を細分化し、より書の生成の段階を詳細に把握しようとしてゐるのである。

王僧虔は「心」によつて法則や秩序、それは書では文字の形や筆路などが相當すると考え、「目」によつてその姿態を認知し、「手」は「心」の方向性に従つて動き、さらには「毫」はその手によつてコントロールされるという。つまりは、書の生成の初期段階には「心」が一定の法則や規則を経なければならぬことが示される。これは、書が文字を記すことである以上逃れられない。その後で「目」で知覺し、手や毫によつて表現されるという展開を順次段階を示しつつ提示する。⁽⁸⁾「一」・「二」について杉村邦彦は、「ここには當時士大夫の間に普遍的であつた老莊や佛教思想の影響があつたかも知れない。單なる技巧の空轉は嚴に戒められるべきであつて、或いは虚・空に飛翔し或いは想念に沈潜する藝術的達觀の重視されてゐる所に思惟の高まりを認めることができよう。」と述べる。⁽⁹⁾ただし、「藝術的達觀」という點においては、いかほどその意識が王僧虔にあつたかは、なお慎重に検討を行う必要がある。

〔三〕風搖挺氣 妍嬾深功

ここで問題となるのが、「妍」といふ語についてである。「妍」は、「妍媚」あるいは「妍靡」といふように熟語としても用いられ、表出した書の人爲的に表現された美を表徴する語として用いられる。「妍」については、王僧虔に先んじて虞龢「論書表」に、

夫れ古は質にして今は妍なるは、數の常なり。妍を愛して質を薄んずるは、人の情なり。鍾・張之れを二王に方ぶれば、古と謂ふべし。豈に妍質の殊無きを得んや。且つ二王の暮年、皆少きに勝る。父子の間、又今古と爲す。子敬其の妍妙を窮むるは、固より其れ宜なるかな。然れども優劣は既より微にして美を會すること俱に深し。故に同に終古の獨絶、百代の楷式と爲すなり。⁽¹⁰⁾

と述べて「質」の對義語としての裝飾として捉えている。これに對して王僧虔「論書」では「妍」という語は見られないものの、「妍」と同義として用いられる「媚」についての言及がみられる。

郗超の草書二王に亞ぐ。緊媚其の父に過ぐるも、骨力及ばざるなり。⁽⁶⁶⁾

謝綜の書、其の舅云ふ、「緊潔生起、實に賞を得ると爲す。」と。
至⁽⁶⁷⁾は羊欣を重んぜず。欣も亦た之れを憚る。書法に力有るも、恨むらくは媚好少⁽⁶⁸⁾し。

とあり、謝綜の評價は「媚」が少ないというが、郗超の場合は「緊媚」で「骨力」が少ないと評している。目加田は、王僧虔は筆力を書に必要第一の要素とみなしていた、という。それはこの「論書」の記述からも判断されるように「妍」と必ず對置して「力」に言及している點が注目される。一方で、「論書」から看取できるように「媚」が少ない場合をも問題にしている。謝綜の例に見るようにその多寡を問題にするということは、理想としては「力」と「妍媚」の程よい調和を求めていることも示唆しているよう。王僧虔の他者の書の評價である。實作における技巧のバランスについては王僧虔も次の箇所述べる。

〔四〕或具美於片巧 或雙競於兩傷

ここにも「一」で提示したように「書賦」のこの二句は「文賦」の表現を踏まえたものと見られる。

或いは仰ぎて先條に逼り、或いは俯して後章を侵す。或いは辭害ありて理比び、或いは言順ひて義妨ぐ。之れを離せば則ち雙び美しく、之れを合すれば則ち兩つながら傷ふ⁽⁶⁹⁾。

表現形式も「文賦」を踏襲しているが、その内容についても踏まえ

られているとみてよいだろう。「文賦」のこの章段は文章構成の對處法について語つた部分である。傍線部で示した箇所は二つの文章表現を別々に見れば美しいが、それを同居させるとどちらもその良さが損なわれてしまうことを述べる。陸機はここで趣の異なる二つの美文があることを前提として行論する。そしてこの後、陸機は續けてこう述べる。

殿最を錙銖に考へ、去留を毫芒に定む。苟しくも銖衡の裁する所となれば、固より繩に應じて其れ必ず當る⁽⁷⁰⁾。

そうした對處法として表現を詳細に比較して、よりよい方を選ぶ必要がある。正しい基準にもとづいて判定したならば、正しい選擇となっているであろう。異なる表現が存在したとき、それらを審定する「銖衡」、すなわち何を基準として一方に決するか。それは文全體として見たときその箇所が他の箇所と整合性が保たれるかによつて判断できる。

これを踏まえて「書賦」の當該箇所についてはいかに解釋できるか。これは表現上の問題であるため「三」で確認した「妍」と「力」の兩者であろう。陸機があくまで文章全體における一部の文や句を想定して行論していることを考えれば、書として表現された全體の一部を問題にしていると考えられる。「妍」と「力」はそれぞれ異なる價値であるからこそ、並べては「兩傷」してしまうのである。こうした「妍」と「力」にまつわる問題を王僧虔はさらに述べる。

〔五〕故其委貌也必妍 獻體也貴壯

この箇所においても再び形質を問題とする。まずここで對になっている「委貌」と「獻體」について分析しよう。

「委貌」は『儀禮』土冠禮の記に「委貌は、周道なり。」⁽⁷¹⁾とあり、鄭

玄注に「委は、猶ほ安なり。言ふところは容貌を安正にする所以なり。」とある。一方の「獻體」については『春秋左氏傳』昭公傳二十七年に

夏、四月、光甲を堀室に伏せて王を享す。王甲をして道に坐せしめ、其の門に及ぶ。門階戸席、皆王の親なり。之れを夾むに鉞を以てし、羞者體を獻じ服を門外に改む。

とあり、衣服を脱ぐという意味で用いられている。これらを踏まえ「書賦」の解釋を行うと、前者の「委貌」は文字の外面を整えること、すなわち、より美しく見せることとなる。したがって、文字を美しくみせようとするからこそ、王僧虔は「必ず妍」となると述べるのである。後者の「獻體」は衣服を捨てること、すなわち「委貌」とは對照的にそうした技巧を凝らしたものは別の美を求めたものであると言えるだろう。より踏み込んで言及するならば、ここには「三」・「四」でみてきた「妍」と「力」の關係が影響しているとみることが出来る。この二句で對句として言及していることから、先の「四」で述べたように「妍」と「力」の兼有を是とし、それぞれに效能があることをこの二句で王僧虔は述べているのである。

「六」跡乘規而聘勢 志循檢而懷放

表現した痕跡というものは規矩に準據することで勢を思うがままにし、志はのりにしたがることで懷いは自由に解放される。

「五」を承けてそれによって尾の二句が達成されるということになる。ここではそれぞれ「乘規（規則・法則にのつとること）」―「循檢（のりにしたがること）」と「聘勢（勢をおもいがままにする）」―「懷放（懷いが自由になる）」が對應しており、規矩や法則に従っていても「聘勢」―「懷放」すなわち、自由闊達な境地に至ることができるのであ

ると述べる。

ここには一見すると「一」での王僧虔の主張に矛盾が生じるように捉えられるかもしれない。しかし、書を表現するに際しては「虚」から發して「情」や「心」で捉えたものをそのまま表象することは不可能である。書をその表現手法とするならば、文字や點畫、結構などの制約とも呼ぶべき法則や秩序が嚴然と横たわっている。それらをひきうけて表現するところに書はある。

以上の分析を踏まえて「書賦」の内容をまとめておくことにする。まず、書の生成における淵源が述べられる。「情」は「虚」であることによつて、「有」の内實をおしはかることができる。また、「虚」であるからこそ、曖昧模糊としたおもいにしたがつて非可感的な對象についてもおもいを巡らせて圖くことができるということが宣言される。これが「書賦」の議論の出發點となる。これは陸機「文賦」を想起させる論旨であつた。そして書の生成の順序が示される。「心」によつて法則や秩序が經驗的に了解され、「目」によつてその形が認知され、「手」は「心」の方向性に従つて動き、さらには「毫」はその手によつてコントロールされるという、「一」で確認した「虚」から發生した「思」・「想」を具現化する段階について述べる。

表現の過程における「妍嬾」については、「論書」の「媚」とともに検討したが、「論書」を踏まえて「妍嬾」を考察すると、「妍嬾」に對置される概念が「力」であり、どちらかに偏向するべきでないことが看取される。特に「三」・「四」で見たように「妍」と「力」は別種の概念であり、それぞれを書の中には兼有させることが必要であることを王僧虔は理想とした。

小 結

本稿では王僧虔の書に對する視座について「論書」と「書賦」からいささかの検討を加えた。

王僧虔が書を語ったその理由。それは「前世の稱目」への「疑」にあつた。「稱目」は人物あるいはその人が有する特定の才藝に對して評價を與えることであり、六朝の人士においては一般的に行われていた。

「古來」との比較を通して見えた王僧虔の「稱目」の特質は王羲之を中心とした價值付けであつた。そのために王羲之の言を引き、王羲之との關係性にあえて言及するのである。こうした書評價を與える他に、王僧虔は書の實作においても名があつた。「論書」が王羲之中心の位置づけを行う「稱目」の書とみるならば、一方で「書賦」は書の生成に係るものであり、王僧虔の「書」觀の両面を架橋することになる。

「書賦」はその冒頭で「情」や「想」が「虚」であることとし、書の根源を非常に抽象的な位置に置き、それと技巧や法則性との關連を宣言するものであつた。そして、趙壹以來の「心・手」の問題をさらに細分化して把握しようとした。また、「論書」にて言及している「妍」と「力」の關係性と相關し、その兼有を是としていたことが「書賦」から窺えた。

結局のところ、王僧虔の「書」觀とはどのようなものであつたか。それは「兼」であつたと結論づけられよう。王羲之の稱揚も崔瑗・張芝であつても王羲之に歸一してしまふ。つまりは、あらゆる美的要素を王羲之が兼有していたからである。そのうち王僧虔が書の評價にお

いて重視したのが「妍」と「力」であり、その兼有が理想、すなわちそれを體現したのが王羲之であつた、とみていたのである。だからこそ、それに論及しない「前世の稱目」へ「疑」いがあつたのだとみることができらるだろう。

「書賦」はあくまでも書の生成過程、書藝術的にいえば創作論である。だが、その發想の根源には陸機「文賦」の存在が色濃いことは確認できた。こうした「文賦」との連關やかかる王僧虔の言説が張天弓が提唱する「文學化（美學化）」に繋がるかは、なお今後繼續して慎重に検討する必要があると考へる。

注

- (1) 張天弓『張天弓先唐書學考論文集』（榮寶齋出版社、二〇〇九年）
- (2) 『南齊書』卷三十三列傳十四 王僧虔傳、『南史』卷二十二列傳十二 王曇首附傳王僧虔傳。（いずれも中華書局本二十四史より）
- (3) 王僧虔の具體的な官歴等については目加田明子「王僧虔小考」（『書論』九、書論研究會、一九七六年）を参照。
- (4) 王僧虔「誠子書」は『南齊書』の王僧虔傳に收載されている。「誠子書」をめぐるのは、例えば、安田二郎と越智重明の研究がある。安田二郎「王僧虔「誠子書」考」（『日本文化研究所研究報告』十七、一九八一年。のち補記の上『六朝政治史の研究』研文出版、二〇〇三年に收載。）越智重明「王僧虔の誠子書をめぐって」（『東方學』六三、一九八二年）および越智重明「王僧虔の誠子書における族門と蔭」（『魏晉南朝の貴族制』研文出版、一九八二年）を参照。また、王僧虔と清談については余英時「王僧虔誠子書與南朝清談考辨」（『中國文化』第一期、一九九三年）を参照。

- (5) 本稿では「書論」とは、書にまつわる言説一般を指す語として用いることとする。
- (6) 前掲、目加田論文を参照。
- (7) 大野修作「王僧虔「論書」より『法書要録』を見直す」(『書學書道史研究』一六、書學書道史學會、二〇〇六年)を参照。
- (8) 本稿における王僧虔「論書」は、『津逮秘書』本を底本とした『法書要録』(人民美術出版社、一九六四年)を使用する。張天弓によれば現行の論書は書人評價の部分で蕭子良に答えた「啓」とし、尺牘とみられる箇所は蕭子良が王僧虔に與えた書であるとする。ただしその行論は張懷瓘「書斷」を用いて遡逆して論證したものであり、なお慎重な検討を要すると考える。「關於王僧虔、蕭子良相論書啓問題答叢文俊先生」(張天弓「張天弓先唐書學考論文集」(榮寶齋出版社、二〇〇九年所收))を参照。
- (9) 『全齊文』卷八(嚴可均『全上古三代秦漢三國六朝文』)では「與某書」と題し、この箇所を「論書」から分割している。
- (10) 承閱覽祕府、備睹群跡。崔・張歸美於逸少、雖一代所宗、僕不見前古人之跡。計亦無以過於逸少。既妙盡深絕、便當得之實錄。然觀前世稱目、竊有疑焉。(王僧虔「論書」)なお「論書」の訓讀と解釋については『中國書論大系』卷一(二文社、一九七七年)および潘運谷『漢魏六朝書畫論』(湖南美術出版社、一九九七年)を参照したところがある。
- (11) 前掲潘運谷『漢魏六朝書畫論』(湖南美術出版社、一九九七年)を参照。
- (12) 銓也。从禾尪聲。(『說文解字』卷七上 禾部)
- (13) 人眼。象形。重童子也。(『說文解字』卷四上 目部)
- (14) 曹操微時、常卑辭厚禮、求爲己目。(『後漢書』列傳第五十八 許劭傳)
- (15) 例えば『南史』卷十六 列傳第六 王玄謨傳に劉宋の孝武帝が群臣を侮蔑した逸話に見える。「孝武群臣を狎侮し、各々稱目有り、須多き者之れを羊と謂ひ、短長肥瘦なるは皆比擬有り。」とある。
- (16) 渡邊義浩「『世說新語』の編纂意圖」(『古典中國』における小説と儒教)二〇一七年、汲古書院所收)を参照。
- (17) 謝太傅絶重褚公、常稱、「褚季野雖不言、而四時之氣亦備。」(『世說新語』德行篇)
- (18) 撫軍與之語言、咨嗟稱善曰、「張憑勃率爲理窟。」即用爲太常博士。(『世說新語』文學篇)
- (19) 毛伯成既負其才氣、常稱、「寧爲蘭摧玉折、不作蕭敷艾榮。」(『世說新語』言語篇)
- (20) 簡文稱許掾云、「玄度五言詩、可謂妙絶時人。」(『世說新語』文學篇)
- (21) 謝太傅稱王修齡曰、「司州可與林澤遊。」(『世說新語』賞譽篇)
- (22) 庾公目中郎、「神氣融散、差如得上。」(『世說新語』賞譽篇)
- (23) 王戎目山巨源、「如璞玉渾金、人皆欽其寶、莫知名其器。」(『世說新語』賞譽篇)
- (24) 王大將軍自目、「高朗疏率、學通左氏。」(『世說新語』豪爽篇)
- (25) 有人目杜弘治、「標鮮清令、盛德之風、可樂詠也。」(『世說新語』賞譽篇)
- (26) 簡文目敬豫爲「朗豫」。(『世說新語』賞譽篇)
- (27) 時人目王右軍、「飄如遊雲、矯若驚龍。」(『世說新語』容姿篇)なお、杉村邦彦「書」の生成と評論 中國書論史序説(『東洋史研究』二五(二)一九六六年)において、この王羲之の評語は王羲之の容姿を語ったものではなく、劉義慶の編纂の過程で容止篇に混入した書の評語であるとするとする。
- (28) 論者稱其筆勢、以爲飄若浮雲、矯若驚龍。(『晉書』卷八十 列傳第五十 王羲之傳)

- (29) この時代の書を論じた文献が個別具體的な「作品」を想定して評價を行っていたのか、あるいはその人物を對象として評價を行っていたかについてはなお判然としないところがある。
- (30) 誕子少季、亦有能稱。(羊欣「古來能書人名」)
- (31) 吳人皇象、能草。世稱沉着痛快。(羊欣「古來能書人名」)
- (32) 崔・杜之後、共推張芝。仲將謂之筆聖。伯玉得其筋、巨山得其骨。索氏自謂其書、銀鉤蠶尾、談者誠得其宗。劉德昇爲鍾・胡所師、兩賢並有肥瘦之斷。(王僧虔「論書」)
- (33) 索靖、字幼安、煥煌人。散騎常侍。張芝姊之孫也。傳芝草而形異、甚矜其書。名其字勢、曰銀鉤蠶尾。(王僧虔「論書」)
- (34) 記述の有無に關わらず、單純に重複する人名を列擧すると、韋誕・張超・鍾繇・索靖・李式・王廙・王洽・郗愔・庾亮・謝安・張翼・謝敷・康昕である。
- (35) 江夏李式、晉侍中、善隸・草。(羊欣「古來能書人名」)
- (36) 李式書、右軍云「是平南之流、可比庾翼。王濛書亦可比庾翼。」(王僧虔「論書」)
- (37) 王洽、晉中書令、領軍將軍。衆書通善、尤能隸・行。從兄羲之云、「弟書遂不減吾。」(羊欣「古來能書人名」)
- (38) 亡曾祖領軍洽、與右軍書云、「俱變古形。不爾至今猶法鍾・張。」右軍云、「弟書遂不減吾。」(王僧虔「論書」)
- (39) 高平郗愔。晉司空、會稽內史。善章草、亦能隸。(羊欣「古來能書人名」)
- (40) 郗愔章草、亞於右軍。(王僧虔「論書」)
- (41) 瑯琊王廙。晉平南將軍、荊州刺史。能章楷、傳鍾法。(羊欣「古來能書人名」)
- (42) 王平南廙是右軍叔、自過江東、右軍之前、惟廙爲最。書爲晉明帝師、
- (43) 書爲右軍法。(王僧虔「論書」)
- (44) 僧虔弱冠、弘厚、善隸書。宋文帝見其書素扇、歎曰、「非唯跡逾子敬。方當器雅過之。」(『南齊書』卷三十三列傳十四 王僧虔傳)
- (45) 當時の議論を一端が「論書」に見える。「宋の文帝の書は、自ら謂へらく王子敬に減ぜず」と。時に議する者云ふ、「天然は羊欣に勝るも、功夫は欣に及ばず」と。(宋文帝書、自謂不減王子敬。時議者云、「天然勝羊欣、功夫不及欣。」)この「天然」と「工夫」は王僧虔以前には虞穌「論書表」において提起され、後の庾肩吾においても問題となる。「天然・工夫」の淵源をめぐって(『書學書道史研究』二十八、二〇一八年)を参照。
- (46) 『藝文類聚』卷七十四 巧藝部 書に收載されており、その他『墨池編』、『書苑菁華』などに載る。本稿では『藝文類聚』(南宋紹興刻本)を底本として、『墨池編』(萬曆八年李時成刻本、および『墨池編』浙江人民出版社、二〇一二年。乾隆年間寶硯山房刻本)、『書苑菁華』(崔爾平『書苑菁華校注』上海辭書出版、二〇一三年。汪汝璣振綺堂本を底本とする。)を参照し適宜校勘を行った。張天弓は「書賦」を信に足る資料であると評價しており、稿者もその見解に首肯する。『張天弓先唐書學考辨文集』(榮寶齋出版社、二〇〇九年)を参照。なお、王僧虔以前にも賦によって書を論じたものには、楊泉「草書賦」がある。『藝文類聚』では「勢」と分類される文體が多く傳わる。成田健太郎「書體を詠う韻文ジャンル「勢」とその周邊」(『日本中國學會報』五十九、二〇〇七年。のち『中國中古の書學理論』京都大學學術出版會、二〇一六年所収)を参照。
- (47) たとえば、張天弓は現行の「書賦」は全篇が傳わっていないとする。

張天弓「先唐詠書辭賦研究」(『張天弓先唐書學考辨文集』榮寶齋出版社、二〇〇九年所收)を参照。

(48) 『墨池編』および『書苑菁華』に基づき「也」を加える。

(49) この句の前後で文意が一貫しないことから、恐らくはこの間に文が存在したと考えられる。しかし、現在ではその考證をすることは叶わないため、指摘するに留める。

(50) 『文選』卷一九 賦癸の「情」の李善による篇題注に「易に曰く、利貞とは、性情なり。性とは、本質なり。情とは、外染なり。色の別名、最末を事とするが、故に癸に居る。(易曰、利貞者、性情也。性者、本質也。情者、外染也。色之別名、事於最末、故居於癸。)」とある。これによれば「情」とは外から染まるものであるという。換言すれば、自身の内面に存在する外的な要素によって變容する部分をいう。

(51) 「思」は『荀子』解蔽に「仁者之思也恭。」とあり、その楊倞注に「思、慮也」とある。慮は『說文解字』卷十一 思部によれば「慮、謀思也。」とあることから、ここでは思考されたところの働き、すなわち心の理知的な部分を指す語として解釋する。

(52) 「想」は例えば、『史記』卷四十七 孔子世家第十七の贊に「余孔氏の書を読み、其の爲人を想見す。(余讀孔氏書、想見其爲人。)」とあり、また、潘嶽の「寡婦賦」には「竊冥たりて翳を潜め、心は存し目は想ふ。(竊冥兮潜翳、心存兮目想。)」とあることを踏まえると、「思」のよるような理知的なところの働きというよりは、對象物を五感で把握できず、時間的・空間的に離れているものを空想し想像するところの働きをいうのであろう。

(53) 有憑虛公子者。(張衡「西京賦」)『文選』卷三二)

(54) 憑、依託也。虛、無也。(張衡「西京賦」李善注)

(55) 深所至也。(『說文解字』卷十一 上水部)

(56) たとえば王粲の「思は流波の若く、情は砥頰に似る(思若流波、情似砥頰。)」(『爲潘文則作思親詩』、『古文苑』卷八)

(57) 往年有意於史、取三國志聚置床頭、百日許、復徒業就玄、自當小差於史、猶未近彷彿。(王僧虔「誡子書」)

(58) 伊茲事之可樂、固聖賢之所歛。課虛無以責有、叩寂寞而求音。(陸機「文賦」)『文選』卷十七)

(59) 前掲張天弓「先唐詠書辭賦研究」および「永明書學研究」(『張天弓先唐書學考辨文集』榮寶齋出版社、二〇〇九年所收)を参照。

(60) 其始也、皆收視反聽、耽思傍訊。精驚八極、心遊萬仞。(陸機「文賦」)『文選』卷十七)

(61) 凡人各殊氣血、異筋骨。心有疏密、手有巧拙。書之好醜、在心與手、可強爲哉。若人頗有美惡、豈可學以相若耶。(趙壹「非草書」)

(62) 「心」と「手」については、王僧虔の「筆意贊」に「又使心忘於筆、手忘於書、心手違情、書不忘想、是謂求之不得、考之即彰。」とあり、「書賦」の他にも言及がある。ただし、「筆意贊」は實際に王僧虔の手によるか不明である。そのため指摘するに留める。

(63) 杉村邦彦「書」の生成と評論 中國書論史序説(『東洋史研究』二十五(二)、一九六六年)を参照。

(64) 夫古質而今妍、數之常也。愛妍而薄質、人之情也。鍾・張方之二王、可謂古矣。豈得無妍質之殊。且二王暮年、皆勝於少。父子之間、又爲今古。子敬窮其妍妙、固其宜也。然優劣微而會美俱深。故同爲終古之獨絕百代之楷式。(虞龢「論書表」)

(65) 郗超草書亞於二王。緊媚過其父、骨力不及也。(王僧虔「論書」)

(66) 謝綜書、其舅云、緊潔生起、實爲得賞。至不重羊欣。欣亦憚之。書法有力、恨少媚好。(王僧虔「論書」)

(67) 前掲目加田論文によれば「論書」の範圍内で明確なことは僧虔が、

質と妍の様式概念では質に親く、天然と工夫の評価原理のうち特に天然と深く係るところの筆力を書に必要な第一の要素とみなしていた」という。

(68) 河内利治によれば、「總じて南朝の〈媚〉字術語は、基本的に〈力〉〈骨力〉〈筆力〉と對比する概念を基本とし、〈媚〉と〈力〉の兩者を兼備することを提起し、さらに王羲之がその兩者を兼備する点において肯定的な見解を出している」とする。(河内利治「書法審美範疇語へ遁媚」考)、『書學書道史研究』第十號、二〇〇〇年)のち、『書法美學の研究』(汲古書院、二〇〇四年所收。)

(69) 或仰逼於先條、或俯侵於後章。或辭害而理比、或言順而妨義。離之則雙美、合之則兩傷。(陸機「文賦」)、『文選』卷十七)

(70) 考殿最於錙銖、定去留於毫芒。苟銓衡之所裁、固應繩其必當。(陸機「文賦」)、『文選』卷十七)

(71) 委貌、周道也。(『儀禮』士冠禮)

(72) 委、猶安也。言所以安正容貌。(『儀禮』士冠禮鄭玄注)

(73) 夏、四月、光伏甲於堀室而享王。王使甲坐於道、及其門。門階戶席、皆王親也。夾之以鉞、羞者獻體改服於門外。(『春秋左氏傳』昭公傳二十七年)

(74) 成田健太郎「書評張天弓著「張天弓先唐書學考辨文集」」(『中國文學報』八〇、二〇一一年)においても稿者と同様の見解が提出されている。